

埼玉県の腸管出血性大腸菌検出状況（2009）

埼玉県で2009年に分離され衛生研究所で確認された3類感染症である腸管出血性大腸菌は、121株でした。2009年の検出数は前年の検出数104株より増加しました。月別の分離株数で見ると、すべての月で発生がみられ、例年通り夏期に多い傾向を示しましたが、12月にも10株の分離がありました。分離株の血清型は例年通りO157:H7が84株（69.4%）と最も多く、次いでO26:H11が18株（14.9%）、O157:H-が11株（9.1%）でした。O157:H7の毒素型別ではVT1&2産生株が67株、VT2産生株が17株でした。

分離された腸管出血性大腸菌の血清型と毒素型(2009)

血清型	毒素型	検出数	血清型	毒素型	検出数
O157:H7	VT1&2	67	O26:H-	VT1	4
O157:H7	VT2	17	O111:H-	VT1	1
O157:H-	VT1&2	9	O103:H2	VT1	1
O157:H-	VT2	2	O145:H-	VT1	1
O26:H11	VT1	16	O165:H-	VT2	1
O26:H11	VT1&2	2	合計		121

患者の発生状況では、県内で複数の患者が発生した外食産業の大型チェーン店を原因施設とするdiffuse outbreakが2事例ありました。事例1は、関東近県で8月中旬から9月中旬にかけて大手ステーキチェーン店の複数の店舗の利用者がO157:H7(VT1&2)に感染した事例でした。県内では患者20名と、従事者3名を含む4名の保菌者の届け出があり、喫食状況等の疫学情報が得られた患者16名はハンギングテンダーを原材料とする角切り肉等を喫食していました。PFGE法による型別では、収集できた23株は10パターンに分けられ、5パターンでは複数株の集積が見られましたが、残り5パターンは1株ずつでした。事例2は、11月から12月にかけて、関東近県でチェーン展開する焼肉店のdiffuse outbreakでO157:H7(VT1&2)及びO157:H7(VT2)の2種類の毒素型による感染事例が発生し、県内では患者4名と、従事者1名を含む2名の保菌者の届け出がありました。他の自治体でも患者発生があり、その調査過程で保存されていた肉からO157:H7(VT1&2)が分離されたとの報告がありました。いずれの事例も1店舗あたりの患者数が少なく、聞き取り調査等の疫学データ集積が困難な事例でした。

今後とも、原因究明調査等へのご協力をお願いします。